

書評

植村 研一 著

うまい英語で医学論文を書くコツ

多田 富雄 (東京大学医学部教授・免疫学)

ある国際誌の editor-in chief をしている関係で、私は毎日のように新しく投稿された論文に目を通す。その中には、すばらしい仕事なのだけれども英文がまずいために reject されてしまうものも時々ある。必ずしも日本人のものとは限らない。英語国民が書いたものでも、イライラしながらでないと読み通せないものがある。何故だろうか。

植村教授のこの本は、そういう問題点の発見から始まっている。永い滞米体験、その間に少しずつ体得していった重要なノウハウ、そしてやはり英文誌の editor として日本人の論文の添削を続けてきた経験をもとにして、一流雑誌に accept され得る英語論文を書くための実践的なアドバイスをこの1冊に凝縮した。沢山ある類書と違うところは、文化的背景の差からくる日本語と英語のロジックの違いを指摘しながら、日本語のロジックを英語のロジックへと転換するための最少ルールを示していることである。

主語のない文で言葉の綾を重んじる日本語と、明確なロジックと思考の流れを大切にする英語の表現との間には少なからぬギャップがある。そのギャップを乗り越えない限り絶対に気持ちのよい英語は書けない。

それは単に永い間アメリカにいて英語に慣れ親しんだくらいでは埋められないギャップである。「慣れた英語」と「習った英語」ではレベルが違う。言葉のロジックの組み立ては習わない限り体得できないからである。

日本人の一番苦手な冠詞の使い方についての章を通読してみよう。なぜ、どんな時、どの冠詞を使うか、その基本的なルールが実例をあげて示されている。それを読むだけで、読者は自分の英語のレベルが一段高まったことを自覚することだろう。読み進むにつれて日本語と英語のギャップが一つ一つ埋められてゆく。そして読み終わった時には、植村教授が“気持ちのよい英語 Comfortable English”といていたのがどういうものだったかを悟ることになるであろう。

しかし、断わっておくが、こういう本を読んだからといって、そのまま良い論文が書けるというわけではない。植村教授の日常を知っている人はわかるだろうが、彼の講演はいかに人を納得させるかという努力に満ち満ちている。大切なところは身ぶりを含めて強調し、話の流れを大切にする。要するに本当に話しかけたい内容があつて、それを理解させるための努力を惜しまないことが良い論文を書く前提条件である。

植村教授がこの本でも触れているように、良い日本語が書けないようでは良い英語も書けない。さらに、言葉に対する洗練されたセンス、英語の深い教養、そして鋭いロジックの組み立てなどが、魅力ある英語論文を書くために必要である。東洋と西洋の2つの文化に通じた植村教授の感性が、この本のアドバイスの背後にうかがわれる。

(A 5判 236頁 2,987円(税込) 1991年 医学書院刊)